

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2018 年度
氏名	渡辺 めぐみ	指導教員 (主査)	田中 勝博

論文題目	<b>対人恐怖心性に対する自己愛傾向および メンタライゼーションの機能に関する研究</b>
------	---

本文概要	
<b>問題と目的</b>	<p>健常な一般青年においても、人見知りや過度の気遣い、対人緊張などの対人恐怖の心理的な傾向、いわゆる対人恐怖心性が認められる者は多く存在している。対人恐怖心性の研究では自己愛傾向との関連が明らかにされており、その関連の背景には肯定的な自己像と否定的な自己像という価値的に乖離のある両極端の自己像が併存していることが挙げられる(川崎・小玉, 2007)。しかし、その関連の在り方は一様ではなく、両者を媒介する要因が存在している可能性がある。その要因として、自分や他人を感情や欲求、意図や信念などの心を備えた存在として捉え、自分や他者の行動を心の状態に関連づけて解釈する能力である、メンタライゼーションが考えられる(菊池, 2012)。メンタライゼーションの獲得により、他者や自己の心の状態に配慮した適応的な対人関係を営む機能を得ることができる(菊池, 2012)。自己愛傾向に関する問題を抱えていても、対人恐怖心性の問題が生じない場合も存在するが、そのような場合には自己愛傾向と対人恐怖心性の関係性にメンタライゼーションが関与している可能性がある」と推察される。本研究の目的は、自己愛傾向と対人恐怖心性の関係性、メンタライゼーションと対人恐怖心性の関係性を明らかにすることである。自己愛傾向との関連において高まる対人恐怖心性の問題に対して、メンタライゼーションが果たす機能について検討する。</p>
<b>方法</b>	<p>無記名式質問紙調査を大学生 274 名に行った。調査内容は、①フェイスシート②対人恐怖心性尺度Ⅱ(堀井, 2006)③NPI-S(自己愛人格目録短縮版)(小塩, 1998)④メンタライゼーション質問紙(山口, 2016)であった。</p>
<b>結果</b>	<p>大学生 262 名(M=19.99, SD=1.35, 男性 86 名, 女性 176 名)を分析の対象とした。相関分析では、「劣等恐怖」、「加害恐怖」と「注目・賞賛欲求」に正の相関が見られた。対人恐怖心性尺度Ⅱの下位尺度と「優越感・有能感」および「自己主張性」では、「加害恐怖」と「自己主張性」の組み合わせを除いて、負の相関が見られた。「対自的メンタライゼーション」と対人恐怖心性尺度Ⅱの全ての下位尺度に負の相関が見られた。次に、ブートストラップ法を用いた媒介分析を行った。「注目・賞賛欲求」と「加害恐怖」では、「対他的メンタライゼーション」の間接効果が有意であった。「優越感・有能感」と「劣等恐怖」、「被害恐怖」、「自己視線・醜形恐怖」、「孤立・親密恐怖」では「対自的メンタライゼーション」の間接効果が、「加害恐怖」では「対自的メンタライゼーション」と「対他的メンタライゼーション」の間接効果が有意であった。「自己主張性」と「劣等恐怖」、「被害恐怖」、「自己視線・醜形恐怖」では「対自的メンタライゼーション」の間接効果が、「孤立・親密恐怖」、「加害恐怖」では「対自的メンタライゼーション」と「対他的メンタライゼーション」の間接効果が有意であった。</p>
<b>考察</b>	<p>「対自的メンタライゼーション」は自己肯定感の低さと対人恐怖心性を媒介し、対人恐怖心性を低下させる可能性があることが示された。自分の能力を適切に評価できるようになり肯定的な自己概念を得ることが、対人恐怖心性の低下につながると考えられる。また、「対他的メンタライゼーション」は、「加害恐怖」を低減させることが明らかになった。自分の言動が他者の感情に与える影響の大きさを適切に判断できるようになると、加害懸念は低下すると推察される。本研究の結果から、自己愛傾向の問題から生じる対人恐怖心性の問題は「対自的メンタライゼーション」が十分に機能していることで、緩和されていると言えるだろう。対人恐怖心性の問題において、自分が何を感じ、なぜそれを感じているのか、自分自身が他者にどれほどの影響を与えているのかといった自己に関する理解を深めることの有効性が示唆されたと考えられる。</p>